

## 審査の結果の要旨

氏名 民内 利昭

日本の学校における体育ならびに部活動における陸上競技指導において、膝を高く上げ、脚を足首まで伸ばして地面を強く後方に押す疾走指導法が広く行われている。そうした疾走指導の原点となっているのが、地面を蹴ることを意識させる歩行指導である。こうした従来の歩行・疾走の指導法に対して、本論文では「蹴らない歩行」（＝蹴ることを意識しない歩行）を指導することで、より効率的な疾走を可能にする指導法のあり方を検証した。

第1章では、先行研究のレビューを通して、いかにして「蹴る歩行・疾走」の指導法が陸上競技指導のなかで定着してきたのかを明らかにした。第2章では、体育教師や陸上競技の指導者たちの言説を分析することで、教科としての体育でスポーツを教材として用いる際に起こる課題について論じた。第3章では、文献資料の分析を通して、明治以降の学校教育における歩行・疾走指導が、歴史的にどのように行われてきたかを明らかにした。そして、近代的な歩行・疾走の動作を形式化するなかで、運動効率を高めるという視点が欠如してきたことを指摘した。第4章では、「蹴らない歩行・疾走」は効率の良い運動動作であることが指導者や競技者たちによって意識されてきたにもかかわらず、実際の指導場面では従来型の「蹴る歩行・疾走」を推進してきた実態を明らかにした。その原因として、たとえ競技者として優れた実績を有する指導者であっても、自らの運動感覚を適切に伝えるために必要となる知識を身に着けておらず、そのために従来型の「蹴る歩行・疾走」を結果として指導に採り入れてしまうことを指摘した。

ここまでの議論を踏まえ、第5章以降では「蹴らない歩行」が有する特徴について動作分析的な観点から検証した。第5章では、小学生に対する実践指導と質問紙調査を通して、「蹴らない走法・歩行」が必要最小限の蹴り動作による歩行であり、それによって疲れにくい歩き方になっている可能性が高いことを明らかにした。そこで、第6章では、トレッドミルを用いて歩行中の地面反力に関する実験を行ない、なぜ「蹴らない歩行」が「蹴る歩行」よりも楽に歩行できるのかについて検証を行なった。その結果、「蹴る歩行」の際には「蹴らない歩行」よりも大きな負荷がかかり、運動効率の悪い歩行になっていることが明らかになった。第7章では、トレッドミル上での歩行に対して筋電図検査を行い、地面を蹴る動作を行う下腿三頭筋のヒラメ筋と腓腹筋の収縮を検証した結果、「蹴らない歩行」では「蹴る歩行」よりも小さな筋収縮で歩行動作を完遂できることを明らかにした。第8章では、本研究で得られた結果を踏まえ、「蹴らない歩行」指導の意義と課題について論じた。

このように本論文は、陸上競技における基礎的な動きである「歩行」に関して、「蹴らない歩行」が「蹴る歩行」と比べて効率の良い運動技術であることを明らかにするとともに、他の運動動作でも効率の良い運動方法を特定・抽出し、指導することの重要性を指摘した。

体育教師や部活動指導者としての経験を活かしつつ、文献分析と実証研究を通して学術的ならびに実践的に示唆に富んだ結論を提示したことが、審査員によって高く評価された。よって本論文は博士（教育学）の学位請求論文として合格と認められる。